

カール・マンハイムの保守主義と歴史・時間概念*

松野靖子**

本稿の目的

本稿の目的は、社会学者カール・マンハイム自身の歴史認識が、彼の研究した保守主義の歴史認識とどの様な点で関係性があったのかを検討し、また彼がそれを通じて保守主義がどの様な時間概念を有すると想定していたのかを明らかにすることにある。

マンハイムは知識社会学を構想したことで有名であるが、彼の初期の作品に『歴史主義』(1924)、『保守主義的思考』(1927)があり、彼が元来これらへ関心を有していたことが理解できる。細谷昂は、マンハイムの知識社会学の学問態度が歴史主義に由来していると指摘しており、以下のように説明している。

カール・マンハイムの知識社会学は、歴史主義から出発し、始終その思考様式に支えられて展開する。ロマン主義以来広くドイツの思想界に浸透したこの思考様式は、啓蒙思潮の伝統をつぐ合理的理性の哲学に対抗して、歴史事象の個性性と発展の概念を旗印としてかけ、いきいきとした現実主義と徹底した歴史内在主義を説くものであった。(細谷 2009: 22)

細谷はこの様に、歴史主義をマンハイムが知識社会学の始点とし、さらに彼が歴史主義について「歴史事象の個性性と発展の概念」をその特質としていたという。

また澤井敦もこのことについて論じており、マ

ンハイムはこの歴史主義を保守主義の一部と考えていたとし、この特質と保守主義との関係性を見ていく中で、その保守主義が独自に持つ歴史意識が明らかにされるとしている。

したがって本稿では、まず一章でマンハイムが独自の学問を形成していく過程を当時の時代背景との関連から見えていき、そこから同時に彼自身の歴史認識の様相について理解する。次に二章で、マンハイムの歴史認識が保守主義に由来していた点について、実際に彼の保守主義の研究を振り返ることで捉え直す。さらに三章で、マンハイムが保守主義を「ユートピア」の概念に類型化することで、そこにある時間概念を見出していた点について明らかにすることを目的とする。

1. カール・マンハイムと知識社会学 — 歴史認識

澤井敦によると、マンハイムはこの自身の学問態度の根底となった歴史的思考について、彼の当時の学問に対する問題意識に対応することの出来るものであったという。以下から、マンハイムがそのように考えるまでの思考の系譜を、当時の時代背景と共に見ていく。

澤井によると、マンハイムは若き時代に G・ルカーチと親交をもっており、彼を中心とした私的な集い、「日曜サークル」にマンハイムは積極的に参加していた。そこでは哲学、芸術や文化、倫理に関する問題について、幅広い世代の参加者によって議論が行われていた。当時のマンハイムはそのサークル内で若手であり、ルカーチら年長世代と感覚的差異があったという。また澤井はそ

*キーワード：保守主義的思考、歴史認識、時間概念

**関西学院大学社会学研究科博士課程後期課程

のことについて、当時の議論の参加者のハウザーがその時のマンハイムの様子について、実際に次のように後のインタビューの中で回顧しているとする。

「彼の感覚と思考のもっとも本質的な特徴は、あらゆる教条主義を嫌悪する態度、一度思い込んでしまわれると二度と修正されることのないあらゆる偏見を嫌悪する態度でした。彼の批判的な精神は、われわれ他の者が、ルカーチの教義に大きく感化されるようになればなるほど、ますますきわだったものになっていきました」。(澤井 2004 : 6-7)

また澤井によると、この数年後に、ルカーチがハンガリー共産党へ入党し、日曜サークルの関係者の多くも彼に続いたといった状況があったといい、当時マンハイム以外で唯一共産党に入党しなかった A・レスナイが、マンハイムが次の様な意見をもっていたと証言しているという。

「疑うことは、知識人の権利ではなく、義務である。知識人には、盲目の信仰という安易な幸福を求める権利はない」。(澤井 2004 : 7)

以上の澤井による引用から、マンハイムは特定の信条へ固執する姿勢について強く嫌悪していたことが窺える。このマンハイムの姿勢は、後の彼の学問態度に大きく影響するものとなる。

また澤井は当時のマンハイムのこうした姿勢のひとつの源泉について、彼の神秘主義への傾倒があげられるという。そのことについて、マンハイムが当時の哲学に対する批判的な見解と共に、次のように述べていたり澤井は説明する。

偉大な哲学の出発点は、世界の本質とはなにか、この世に生をうけ生きるとはそういうことなのか、われわれはいったい誰なのか、といった究極的な問いであった。しかし、このような問いは、もし概念を用いて問いが立

てられ、論理的に追及されるとしても、どうしてもそこから抜け落ちるものが生じざるをえない類のものである。(澤井 2004 : 8)

続けて澤井はマンハイムについて、次の様に説明する。

ましてや、このような問いを、概念のレベルで体系的に処理すること自体が自己目的化してしまうと、出発点であった問いが何であったかということさえ忘れ去られてしまう。マンハイムによれば、今日の哲学の多くは、残念ながら、この様な傾向にある。それにたいして神秘主義は、究極的な問いに直面した時の畏怖、不安にあくまでも忠実であろうとする。この意味で、神秘主義は常に「哲学の良心」である、とマンハイムは述べる。(澤井 2004 : 8-9)

したがって澤井は、この様に問いに対し体系的把握をする傾向にあった哲学へのマンハイムの違和感があったからこそ、先程の「概念や理論で真理をつかんだと信じ、自らの絶対的正当性を疑わない教条主義」(澤井 2004 : 9) へも彼が否定的であったと説明する。しかし澤井はまた、マンハイムはこの神秘主義を全面的に肯定していたわけではなく、神秘主義による「現実逃避的」な傾向については批判していたとする。澤井によると、マンハイムは神秘主義が「自己の内面に沈潜し、内側に閉じこもることで、結果として現実の背を向け」ていると考えた。(澤井 2004 : 10) 彼によると、マンハイムはその時の神秘主義が当時の時代の現実の文化を無視したものとなってしまっていると指摘し、したがって文化の在り方にも悪影響が及んでいるとする。そのことについて、澤井は次のように説明する。

マンハイムによれば、文化は、本来、個々人の相互のコミュニケーションを可能にし、それによって人々の連帯をうみだす役割になっている。しかし、現代において、文化

1) プロッホの著作『ユートピアの精神』(1918)の書評(1918)の中でマンハイムが述べていたと澤井は言う。

は、個々人のコミュニケーションを可能にし、それ固有の内在的な諸原理にしたがい自律的な力として展開しており、その結果、もともとの産みの親であるわれわれ人間とは疎遠なものとなってしまっている。(澤井 2004 : 10)

澤井によると、マンハイムはこのような状況について「われわれはもう一度、われわれの手になる文化、新しい文化の見取り図を描きなおさねばならない。」(澤井 2004 : 10) とし、その解決方策として「多元的な視野から個々の文化領域の状況を分析していくことこそ、出発点となる。」(澤井 2004 : 10) と述べている。しかし澤井によると、マンハイムはこの時点で具体的にそれらの文化の見取り図を描いていた訳ではない。澤井によると、この後にマンハイムを取り巻く大幅な政治状況の変化が、彼に大いに影響を及ぼすことになるのだという。具体的には、当時マンハイムがいたハンガリーにおいて政権が交代し、ルカーチが支持していた共産党関係者が他国へと亡命するに伴い、マンハイムもルカーチの関係者としてウィーンへと亡命することとなる。

澤井によると、マンハイムが居住先のハイデルブルク大学で学問活動を行っていた当時の状況として、合理主義者らによって、文化や人間のうちに超越的で普遍的なある合理的な価値体系が設定されたということがあったという。そしてその傾向は学問分野にまで及び、それに対しマンハイムは危機感を抱いていた。澤井によると、マンハイムは生きた人間社会における真理とは、人間の「生」的な要素である非合理性にあるとし、さらにこれらは動的な社会の変化の中で見出されるものであると考えた。当時の合理主義による世界観においては、これらの非合理性が排除された「静的な思考」であり、理性による価値観のみが正しいとされていたことに對し、マンハイムはこれを正しい真理の認識をむしろ不可能にさせるとして問題であると考えていたと澤井は言う。彼によると、当時の実際の学問世界における状況もまた、彼の当時の問題意識を反映させたかのように、思考の対立が全体に存在していたという。

また澤井によると、マンハイムはそれら思考の

対立の源泉となったものについて、それらが自然科学的思考と、精神科学・歴史主義的思考の対立に由来するものであるとして考えたという。

そして澤井によると、マンハイムはこの思考の対立の契機が、フランス革命によって影響を受けたドイツの当時の状況に存在すると考えたという。そのことについて、澤井は以下のように語る。

上述の「自然」と「歴史」の対立の発端は、ドイツにおいて、フランス革命の影響下にある 19 世紀前半の政治的・イデオロギー的闘争に見いだされる。その結果、二つの思考の対立は、「自由主義的思考と保守主義的思考の対立」(K 51)、つまり、フランス革命に迎合する自由主義的思考とそれに対する意識的な反発・防御としての保守主義的思考の対立としてとらえ返されることになる。(澤井 1987 : 54)

澤井がこう語るように、マンハイムは当時のドイツにおいて二つの分裂した思考の一方が自由主義、それに対抗的な立場として生じたもう一方の思考を保守主義だとして捉え、それらが後に、既に述べた自然科学的思考と歴史科学的思考となったと考える。従って澤井によると、「マンハイムの中で自然科学-自由主義、歴史科学-保守主義という関係づけがなされる」(澤井 1987 : 54) ようになったのだという。

そして澤井によると、マンハイム自身はこの「歴史科学-保守主義」の立場を取る事から、この対立する思考において、特に 19 世紀ドイツにおいて発展した保守主義による思考様式についての分析を試みたという。したがって、澤井はまた以下の様に述べる。

マンハイムが、「保守主義」を研究の対象に選んだのは、「歴史的思考」、さらにはマンハイム自身の知識社会学の政治的・イデオロギー的系譜を、19 世紀前半の保守主義的思考にさかのぼることによって、歴史的・発生論的に明らかにするためである。(澤井 1987 : 55)

このように澤井によると、マンハイムは自身の学問的態度の源泉となった歴史的思考について、詳しく分析し明らかにする必要があると感じたのである。したがって、彼がそもそも保守主義に関して、動的な思考をする歴史科学をそれに結びつけて考えていたことが理解出来る。

2. 保守主義とその定義—歴史認識

以下から実際に、マンハイムが自身の研究態度にまで取り入れた保守主義についての彼の分析について具体的に見ていくこととする。

澤井は、マンハイムの保守主義の分析の具体的内容について、以下のように説明する。

マンハイムは、メーザー、ミュラー、フーゴー、ザヴィニーといった思想家を中心として歴史的・社会学的分析を進めていく。これらの思想家の叙述において特徴的であるのは、マンハイムが、自らの知識社会学的思考の特質を彼らの思想の中に読み取っているということである。例えば、「動的思考」、「総合」、「自由に浮動するインテリゲンツ」、「存在拘束的思考」といったマンハイム自身の概念によって、彼らの思想内容、政治的立場が叙述される。(澤井 1987: 64)

そしてまず、この「動的思考」、「総合」というマンハイム自身の概念による、保守主義的要素の形成に関わった人物としてメーザー、ミュラーを取りあげ、特にこのミュラーについて、マンハイムは詳しく分析している。澤井によると、マンハイムはミュラーについて、当時のブルジョア的合理主義によって体系化された思考のもと、静的体系としての国家という考えを進めていたのに対抗して、ミュラーが「生き生きとした『動的思考』の中に政治的問題を解決する鍵を見いだしていた」(澤井 1987: 65) という。このことについて、澤井はさらに詳しく以下の様に述べる。

マンハイムによると、ミュラーの動的思考を特徴づけるのは、「媒介」の概念である。ミュラーによると、歴史の中にある具体的状況は、普遍的法則の特殊事例として捉えることはできず、むしろ、互いに対立しあい、動的に変化する諸要素²⁾のその時々「動的総合」、媒介の所産である。従って、国家も、静的秩序として把握され得るものではなく、むしろ、生成し、運動する存在であり、様々な諸力の動的均衡という理念としてのみ把握される。以上のような「動的思考」においてミュラーが強調するのは、本来「内面から」のみ体験することの出来る純粋な生成、まさに「生の概念」である。(澤井 1987: 65)

こう澤井が述べるように、ミュラーはマンハイムによると、現実には様々な状況が常に変動を伴いつつ、混沌とした状況のまま成立しており、決して一義的な秩序によって固定化されたものと捉えることはできないという。そして澤井によると、このような動的思考、またそうした混沌とした状況が「総合」されたものとして世の中を把握するという方法は、後のマンハイム自身の学問態度の先駆となったという。

しかし澤井によると、マンハイムはここではあくまでも、現実を固定化されたものではなく動的なものとして捉えるという点においてのみ評価しており、マンハイムはこれがまだ外的な現実世界に開かれていないと考えていたという。

そしてマンハイムはここから、その問題に対応したとする新たな思想的立場の担い手として、当時の歴史学派の分析に移っていく。その歴史学派について、澤井は既に触れたミュラーらの立場と対比させつつ、次のように説明する。

メーザー、ミュラーらのロマン主義的・身分主義的立場は、結局、歴史そのものから逃避し、純粋に内面化された動的なるものの体験に向かう傾向を生みだした。しかし他方で、保守主義的思考には、現実において生成

2) マンハイムによるとミュラーはこれを「動的」定義と呼んでいたと言い、「たとえば、熱さを冷たさによって、……この把握からすれば、自然それ自体が『無限の対立から成っている全体(有機体)にほかならない。』」とマンハイムは説明している。

している動的なるものを、歴史そのものの中に見いだそうとする二つの傾向が存在した。つまり、ヘーゲル³⁾、及び前述の歴史学派である。ヘーゲルが、しかし、計算的・抽象的合理性をより高次の動的な合理性（弁証法）によって克服したのに対して、歴史学派は、歴史的な生、つまり、純粋に動的で非合理的なるものを世界現象の本質と見なし、いわばそのただ中に身を置こうとする。（澤井 1987: 66）

澤井によると、マンハイムはこの歴史学派であったザヴィニーについて、人間の「生」的な要素を、歴史的において常に新たに生成するものの中に求めた。澤井はマンハイムによるミュラーの分析について、ミュラーはロマン主義の立場であり、時代の発展性といったものについては考えていなかったのに対し、ザヴィニーにおいては時代の変化そのものの中に世界現象の本質があるとして、これを重視していたという。そのことについて、澤井は以下のように語る。

ミュラーにとって、歴史が、諸身分間の実り多き永遠の争いであるのに対して、ザヴィニーにとって、歴史における実り多き契機は、無意識的なるものの発展が具体的な現実性において徐々に明らかになっていくという点にあった。（澤井 1987: 68）

こう澤井が述べるように、ザヴィニーにおいては、「無意識なるものの発展」といったものが重視されており、またさらにここからザヴィニーの議論が展開していくこととなる。澤井によると、そのザヴィニーによる「無意識的なるもの」とは、具体的に民族精神の内に存在しているものであると言い、これについて澤井はザヴィニーの法についての考えを通しつつ、以下のように述べる。

ザヴィニーによると、法は、民族の本質と性格に有機的に関連したものであり、民族とともに成長し、また衰退する。そして、この「民族の本質と性格」とは、言い換えれば、民族ゲマインシャフトの中のすべての個人及び客体化物の内に、「内的な必然性」をもって、潜在的・無意識的に作用している力である。（澤井 1987: 67）

澤井がこう述べている様に、民族の変化の過程において、ザヴィニーは民族共同体に内在する精神的なものが、それらと有機的に繋がりをもつ法と連動すると述べている。ここから、先の澤井の引用でザヴィニーが発展性を認めていた「無意識的なるもの」が、彼においては民族共同体に内在するものであると捉えていたことが分かる。いずれにせよ、マンハイムにおいては民族の発展性が認められていたことが理解される。澤井はこのザヴィニーがミュラーと異なる歴史についての意識をもち、歴史について前進性を認めたというような、両者に違いが生じた理由について、さらに澤井は彼らの実際の身分にその要因をみる。澤井は以下のように述べる。

ザヴィニーの出自はなるほど貴族であるが、彼は後に官吏（大学教授）となる。ザヴィニーの精神性は、いわば、「官吏の精神性の枠組み形式の内部で生き生きとなった身分主義・ロマン主義的心性」（K 222）と呼ぶことができる。官吏の精神性は、古き伝統の保守へ向かうとはいえ、反動的ではない。それは、程々に進歩的であり、システム全体を変化させようとはしないが、システム内部の修正に常に心を向けるものである。それに対して、ミュラーは、上述のように、「自由に浮動するインテリゲンツ⁴⁾」であった。この立場から、彼は、合理主義に対する反抗により純粋にコミットすることができた。彼は歴史

3) 澤井によると、マンハイムは『旧保守主義』の末尾において、保守主義的思考の第三の類型としてヘーゲルに関する分析が予告されているが、結局具体化することはなかったという。

4) マンハイムによると、これは当時、社会的に異なる身分的立場を渡り歩いていた知識人を指し、彼らが社会的に自由浮動的な立場であったことから、マンハイムは彼らの社会の諸身分領域に対する洞察が優れたものであるとして評価していた。

の車輪を中世に向けて逆に回すことを望む程に反動的たりえた。(澤井 1987: 69)

このように、澤井は両者の歴史認識の違いについて、ザヴィニーは確かに民族精神の中に生き生きとしたものを捉えたことから、身分的原理を擁護することとなったのであるが、それはあくまでも官吏の精神性によって拘束されており、それらの精神性から旧世界の漸進的な進歩は認めていたのである。澤井によると、これに対してミュラーは、もとはブルジョア出身であり、後に貴族と身分主義的思考法を正当化する論文を記述することを依頼されたという立場から、当時のブルジョアの合理主義らが推し進めようとした静的体系としての国家に対抗して、旧世界においては人間本来の生き生きとした動的なものが保障されていたとミュラーは主張し、全面的に正当化しようとしたのであるという。

このザヴィニーが民族において変化を認めており、必要に応じて修正を施すといった態度について、マンハイム自身の態度としてもこれを取り入れていたと澤井は言う。澤井によると、マンハイム自身、当時のドイツの精神的雰囲気として、すべてが相対化する傾向について憂いていたという。そのような当時の状況について澤井は以下の様に述べる。

当時の、いわゆるワイマール時代は、第一次世界大戦以降、従来の社会的・政治的方向づけが失効したが、いまだ新しい方向づけがみいだされず、すべてを相対化する動きが主流となった状況として描かれることが少なくない。マンハイム自身も、…当時のドイツの一般的な精神的雰囲気として、精神的な方向性の多様性、錯綜、動揺をあげている。(澤井 2004: 21)

続けて澤井はこの当時の状況について、以下の様に述べる。

マンハイムによれば、知識人たちは、特定のセクトの一員となり、世界をなんらかの「主義」からみようとす傾向にあるが、皆

が信じられる単一の「主義」があるわけではなく、また、たとえある「主義」が選ばれたとしても、各々がそれに完全な信頼を寄せているわけでもない。逆にいえば、偶然的なものであっても、周縁的なものであっても、いかなるものでも世界の中心に据えられうるのである。そして、生活は、新しい可能性の素描に満たされているが、実際のところその輪郭を満たす内容はない。(澤井 2004: 21)

そして澤井によると、このような相対化の時代においてあらゆる立場が対立していた混乱状況に「なんらかの方向づけをみいだしていこう」(澤井 2004: 22)とし、そのために既に述べた歴史学派らによる態度を自らに取り入れたという。マンハイムは知識社会学において、様々な思想的立場についての研究をすることで、それぞれの世界観が異なっている事を見いだしたことから、それらに共通する絶対的な基準などが存在しないことを認めてはいるが、それでもそれぞれの立場が外的な社会状況について自らを開こうと努力することで、それぞれの思想的立場の背後に共通して存在する、時代の方向性といったものを把握出来る可能性があるとして、マンハイムはそこに希望を見いだしていたと澤井は言う。

マンハイムが知識社会学によって当時の状況へと対処しようとしたことについて、澤井は次の様に説明する。

知識社会学をつうじて、各々の立場は、普遍妥当性を有する絶対的なものとはなりえず、部分的・相対的なものとどまるということが明白となる。しかし、マンハイムが重要視するのは、むしろ、こうした相対化をへて、各々の立場が、自らの立場に閉塞するのではなく、逆に、自らの立場の部分性を他の立場をつうじて補完することに開かれてあり、視野を拡大していくということである。いわば、「自己相対化と自己拡張の連動」という動きのなかで、新しい社会的・政治的方向性を探り出していくことが、ここでのマンハイムの基本姿勢である。(澤井 2004: 23)

つまりここから澤井によると、マンハイムは各々の立場が変動する外的状況を受け入れ、自らを新しい時代状況へと常に対応させていくことで、社会的・政治的方向性を見いだせるのではないかと考えていたことが分かる。マンハイムはこの理論を現実の文化状況にも応用し、次のように考えていたと澤井は述べる。

相対主義は、「集合的運命」によって克服される。つまり、文化が世代とともに成長していくこと、若い世代が、新しい光を、新しく生成した内容に向けていくことに、マンハイムは希望をつないでいる。(澤井 1987: 71)

したがって澤井によると、ここからマンハイムは変動する状況において常に発生する新規性に注視するべきであると見ていたことが分かる。そして澤井によると、このような歴史学派から由来した考えが、後のマンハイム自身の歴史主義的立場を構成するものとなったのであるという。つまり、歴史主義においては、本論文の冒頭の細谷による議論において確認した様に、「歴史事象の個性性と発展の概念を旗印としてかかげ、いきいきとした現実主義と徹底した歴史内在主義を説くものであった」(細谷 2009: 22) ことが理解出来る。そしてそのマンハイムの考えの背後には、彼が相対的社会状況を克服し、ある種の未来へ方向性を志向していたことに基づいていたことが澤井の議論から確認できた。したがって、マンハイムによる歴史主義の考えには、未来へと時代が発展すること、またそれら社会全体の発展性にある方向性が存在するということが前提とされていたことが理解でき、さらにそれらが保守主義に由来していたとマンハイムが分析していたことが確認できた。

3. 保守主義とユートピア概念—時間概念

そして、保守主義のこの、未来へと歴史が発展すると考える事について、マンハイムは「ユートピア」という概念を用いて説明している。この「ユートピア」という概念について、「イデオロギー」という概念と対比しつつ、澤井は以下のように説明する。

イデオロギーもユートピアも、「現実」を超越してしまっており、「現実」を覆い隠してしまおうという意味で「虚偽」と評価される意識や視座構造を特徴づけるものである。そのさい、イデオロギーは、過去に準拠しており、「現実」にいわば追いついていない意識あるいは視座構造である。これにたいして、ユートピアは、未来に準拠しており、「現実」をいわば追い越してしまっている意識、あるいは視座構造である。(澤井 2004: 67-68)

また澤井は、以下のようにも述べる。

また、イデオロギーとは異なり、ユートピアについては、現時点で存在を超越していても、時間の経過にともなって、古い現実を変化させ新しい現実をつくりだしていく可能性がある。(澤井 2004: 68)

この澤井の説明のように、ユートピアとは、現実を超越したところに照準があり虚偽性を帯びているが、時間の変化に合わせて現実そのものを生み出す可能性を有するものであるという。

そして、マンハイムによると、保守的な観念⁵⁾は「ユートピア的な意識の第三の形態⁶⁾」であるとして、これを分類している。

そしてマンハイムによると、この保守的な意識とは、それ自体としてはユートピアをもち得ない

5) 『イデオロギーとユートピア』の中で、マンハイムは保守的な意識について、「保守的な観念」と称している。

6) マンハイムは『イデオロギーとユートピア』の中で、保守的な観念を「ユートピア的思考の第三類型」として位置付けている。

が、「自由な啓蒙的な観念」(Mannheim 1929: 243)の登場によってはじめて、自身の態度を形成するようになる⁷⁾という。マンハイムによると、「自由な啓蒙的な観念は、保守主義者にとっては、それ自体としては、何か空虚なもの、具体性を欠いたもの」(Mannheim 1929: 243)であり、さらに彼は、『(保守主義者にとっては)この観念は、たんなる「意見」であり、たんなる表象であり、個人が身を隠し、控え目にして、時間の要求を回避しているような可能性である』(Mannheim 1929: 244)としている。

マンハイムはユートピアとして4種類の観念⁸⁾を類型化しており、三上剛史(1993)によると、これらのユートピア的な意識が生成される契機として、上述の保守的な意識の場合のような対立する立場の登場により、これら観念の担い手のアイデンティティが何らの理由で脅かされる事態が重要であるとしており、その際に観念の担い手が「新たな歴史」を構想することで、自己をある地点へ新たに定位させることを可能にするのであるという。三上はそのことについて、次のように説明する。

歴史の構想によって、集団の新たな歴史的・社会的自己定位を可能にし、独自の社会的役割を自覚させると共に、集団が一個の統一体として存立することを可能にせしむるもの、これはまさに集団にとってのアイデンティティにほかならない。担い手たちは、ユートピア的な意識を形成することによって、自分が何者であるか、歴史的・社会的にどのよう

に位置づけられるのかを自覚する。(三上 1993: 149)

このように三上によると、各観念の担い手が自己を確立するために、それぞれが独自の歴史を新たに構想するところにユートピアの性質が見出せるとしている。三上はこの新たな歴史の構想により、集団自我同一性を人々が得られるとしている。彼はまず、自我同一性を「集団の中で、未来に向かっての有効な歩みを学ぶ途上にあるという確信」、「特定の社会的現実の枠組みの中で定義されている自我へと発達しつつあるという確信」(三上 1993: 152)と確認した上で、集団自我同一性について次のように説明する。

ここで自我同一性の定義における「自我」を、集合的行為者としての集団に置き換えれば、特定の歴史的・社会的枠組みの中で未来に向かって有効な歩みの途上にあるという確信を「集団的自我同一性」と呼ぶことができる。(三上 1993: 152)

したがって三上の説明から、各観念の担い手が集団としての自己確立を行う際、特定の歴史的・社会的枠組みの中で、集団にとっての理想の未来へと漸進していくという時間軸が新たに発生することがユートピアの性質として見て取れる。

ここからさらに三上によると、それらの担い手の「生成基盤⁹⁾」、「社会的位相¹⁰⁾」がいかなる様相を呈しているかによって、それらの時間意識の在り方が決定付けられるとしている。具体的に

-
- 7) マンハイムはこの部分について、次の様に説明している。「保守的な意識はそれ自体としては理論的につくられたものではない。これは、人間というものが、自分をとり囲む現実の情勢に上手く適応しているかぎり、この現実の情勢を理論的に反省する対象としない、という事実と照応している。……ただ、反対する階層の反対運動と、この階層の現存秩序を破壊しようとする傾向だけが、いわば外部から、保守的な意識をして、この保守的な意識自身を歴史哲学的に反省させるようにし、自分の方向を決定させ、防御する手段として役立つような反対ユートピアを生みださせている」(Mannheim 1929: 240-241)
- 8) ユートピア的な4種類の観念としてマンハイムは、「至福千年説」、「自由主義」、「保守主義」、「社会主義」をそれぞれ類型化している。
- 9) 三上によると、「生産基盤とは、社会集団が集団として存続・拡大してゆくための客観的基盤を指す。成員の数的補充と社会的同質性の維持、ならびに経済生活がどのような基盤に支えられているかということである。」(三上 1993: 157)という。
- 10) 三上によると、「社会的位相とは、静的な社会的位置ではなく、新興位相か危機位相かという動的な概念である。生産基盤が集団の発展を支える客観的基盤を指すのに対して、こちらはその集団的生成の局面を示す。」(三上 1993: 157)という。

は、生産基盤が「自律的生成」か「他律的生成」かどちらを性質とするか、また社会的位相が「新興」か「危機」のどちらを集団生成の本質とするかといった違いが、各時間意識の差異を生み出すとする。彼はこれらの概念を、歴史構成の基点である「現在」の位置づけと対応させ、次のように述べる。

歴史構想の基点である「現在」の位置づけと対応させてみると、自律的生成基盤¹¹⁾を有する自由主義・保守主義は「現在」を連続点と捉えるのに対し、他律的生成基盤に依存する千年王国運動と社会主義は「現在」を非連続点と見ていた。また、新興位相にある自由主義・社会主義が「現在」を発端として体験するのに対し、危機位相¹²⁾にある千年王国運動と保守主義は「現在」を終局として体験していた。(三上 1993 : 161)

したがって三上によると、マンハイムの想定する保守主義のユートピア的な歴史意識に基づく時間意識とは、「現在」を連続点と捉え、またその「現在」が終局に位置するものと考えていたという。

以上を総合すると、マンハイムにとって保守主義の時間概念とは、時間を連続するものとして考え、「現在」をその終局点と見なすが、また同時に「現在」を発端として未来へと漸進していく性質を見出していたことが理解出来る。

4. 意義と課題

以上を踏まえ、最後に本稿の知見の意義と課題について述べたい。本稿は、まず一章にてマンハイム自身の歴史意識が当時のドイツの状況を背景として展開した点を再検討し、二章にて彼がその歴史認識の由来元を保守主義に見出していた点について捉え直し、そして三章にてマンハイムのユ

ートピア論から、保守主義の時間概念をどう想定していたかについて見てきた。

以上より、マンハイムの歴史観が未来への発展性を特徴としたものであったこと、また保守主義がそうした歴史観を形成する源泉であったとして彼に位置付けられていること、そしてマンハイムにとっての保守主義の時間概念が、現在を起点とし未来へと漸進していく性質があると考えていたことを明らかにした。

こうした本稿の知見の意義は、現在日本で「保守的」と称される事象が増え、それと共に保守主義について多様に研究がなされている状況で、改めてマンハイムの保守主義についての理解を、歴史認識、時間概念という観点から捉え直すことで、保守主義の社会学研究における歴史・時間という概念を再定位する視点を提供するものである。

最後に、マンハイムの保守主義研究における歴史・時間概念は発展性、漸進性を有しているとしていたにとどまり、その他の時間概念の類型の可能性については彼によって想定されていなかった点に触れておきたい。保守主義の時間概念については、この他の類型の可能性も考慮し、より明確にしていくべきであるが、この部分については別稿を期したい。

参考文献

- 細谷 昂, 2009, 「歴史主義的思考と知識社会学の論理」『社会学評論』9(4) : 21-32.
- 三上 剛史, 1993, 『ポスト近代の社会学』, 世界思想社.
- Mannheim, Karl, 1924, *HISTORISMUS*, Heidelberg : Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. (= 森博, 1969, 『歴史主義』, 恒星社厚生閣).
- , 1927, *DAS KONSERVATIVE DENKEN : Soziologische Beiträge zum Werden des politisch-historischen Denkens in Deutschland*, Heidelberg : Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. (= 森博, 1997, 『保守主義的思考』筑摩書房).
- , 1929, *IDEOLOGIE UND UTOPIE*, Heidelberg :

11) 三上によると、保守主義の場合、生産基盤が土地貴族層であり「土地支配によって安定した基礎を有しており、その生成は同時に生活共同体によって支えられている」(三上 1993 : 160) ことから、自律的な生成基盤をもつと分類されるとしている。

12) 三上によると、「保守主義は絶対主義と新興ブルジョアジーの台頭に圧迫され、次第に新しい社会層によって席を奪われつつあるという点において没落的危機位相にある」(三上 1993 : 160) という。

- Friedrich Cohen. (=鈴木二郎, 1968, 『イデオロギーとユートピア』, 未来社).
- 澤井敦, 1987, 「知識社会学と自己反省-K. マンハイムの保守主義論をめぐって-」『哲学』三田哲学会, 85: 49-77.
- , 1994, 「マンハイム知識社会学の研究」, 『慶
応義塾大学大学院社会学研究科紀要: 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education)』40.
- , 2004, 『カール・マンハイム-時代を診断する亡命者』, 東信堂.

History-recognition and the Time-concept of Conservative thought in Karl Mannheim

ABSTRACT

In this paper we consider from study of his work how the history-recognition of Karl Mannheim himself relates to history-recognition as defined by conservative thought, and thereby clarify Mannheim's assumption that conservative thought should also include time-concept.

We show how Mannheim's history-recognition has the characteristic of development, being the basis of his further study of conservative thought and time-concept, allowing him to move gradually from the present to the future.

The significance of this paper lies in its thorough review of the position of conservative thought on history-recognition and time-concept by recasting Mannheim's idea of these in terms of the current Japanese situation in which so-called "conservative" phenomena are increasing, while at the same time much research is being done into conservative thought.

Key Words: conservative thought, history-recognition, time-concept